

山肌を巻き上がる冷たい上昇気流が、ジャザリッヒモンの翼のより高く舞い上げた。霧の切れ間から差す白い光の中で、ジャザリッヒモンの輪郭が一度だけ鮮明に浮かぶ。

「出すぎかな？」

「出なきゃ見つけて貰えないよ。」

いつもの希理江と比べ、返答は平坦であり、それは、希理江が集中し真剣になっている証拠であった。

わざと高度を変えた。完全な隠密ではない。見ようと思えば見える、だがまだ侵入確定とは言い切れない、そんな曖昧なラインをなぞっていく…数秒、さらに数秒。

そして、山頂寄りの空域で、一体のエンジェモンが反応した。

白い翼がこちらへ向く。次いで、別の位置にいた個体が二体、遅れて旋回する。

連鎖はきれいだった。誰かの怒号も、慌てた動きもない。

ただ、決められた順番がスイッチのように入っていく。

「来たよ！」

「下位個体が捕捉。」

次に上位個体が進路を押さえる。

最後に追跡役を。」

ジャザリッヒモンは急旋回せず、あえて緩い弧を描いて逃げた。

必死に見える逃げ方ではない。追う側に、「まだ捕まえられる」と思わせる速度を保っている。

白い影が迫る…エンジェモンたちは一直線に来ない。

左右に割れ、逃げ道を狭める位置を取ろうとしていた。

それを見たジャザリッヒモンは、斜面すれすれまで高度を落として岩塔の裏へ滑り込む。

後ろを取ろうとした一体がわずかに進路を余らせ、もう一体がそれに合わせて微調整する。

引き離していく、山頂にいるヴォーボモン達のことを思い浮かべる。

今だけは、そちらに視線が向いていない、それは一先ず囿としての役割を全うした安心、そして、危険を引き受ける意味になった。

作戦は単純明快で、希理江達が囿となりシスタモン・シエルと叶達がタイマンの状態に持っていき、ヴォーボモンをゲートを潜らせマテリアルワールドへ送り出した後に離脱する。

山の影からで、さらに別の影が動いた。

獣じみた輪郭…マンティコアモンが、天使型の隊列より遅れて放たれる。

マンティコアモン自体は飛べないが、その身軽な動きで飛行している天使達と同等、それ以上に素早くジャザリッヒモン達を追跡してくる。

「そろそろ、引き付ける数も限界だね。」

「じゃあ行くよ！」

ただ翼を打ち、進路をさらに東側の岩峰地帯へずらした。

天使達を、広い場所ではなく障害物の多い地形へ引き込む。



マンティコアモンが獲物…ジャザリッヒモンを捉えた瞬間に散った。
上下、左右あらゆる岩峰の陰から、牙のついた矢のように飛び出してくる。
「クソ…多い…!」

ジャザリッヒモンは思わず声を漏らした。
10 やそこらではない。見えるだけでその倍はいる。
希理江はジャザリッヒモンに指示を出し、一度だけ攻撃を掻い潜り高度を上げて全体を見ようとした

次の瞬間には、真正面から突っ込んできた1体の爪を紙一重で外す。
金属質の爪が空を裂き、直後に岩壁が抉れた。
砕けた石片が雨のように散る。

「っ…!」
ジャザリッヒモンは岩塔の間へ身を滑り込ませたが、狭い。
だからこそ、速度に乗ったマンティコアモンは軌道修正が遅れる。
一体が岩柱に肩からぶつかり、もう一体がそれを避けようとして高度を失う。
天使達と比べ統制が取れていない…しかし、それは読みやすいという意味ではなくむしろ逆だった。

1体が外せば別の1体が横から食らいつく、決まった手順がないぶん、行動が荒く、予測の外に飛び込んでくる。

希理江は、飛行に専念しているジャザリッヒモンの為に、必死に敵を見失わないようにした。
ジャザリッヒモンの黒い影が岩峰のあいだから現れては消える。
そのたびに、マンティコアモンの咆哮がいくつも重なる。

「ジャザリッヒモン!」
一体が下から跳ね上がった。ジャザリッヒモンは翼を畳んで落下し、寸前で開いて横へ抜ける。
避けきった、そう思った次の瞬間、別の個体が横合いから爪を振るわれ、鈍い音がした。
ジャザリッヒモンの肩口を裂かれ、黒い破片が散る。

「っ…!」
息が詰まる。
しかしジャザリッヒモンは、傷の勢いをそのまま利用するように姿勢を崩し、逆に急角度で下へ落ち岩壁の間に入る。
追ったマンティコアモンが2体、3体とつられて岩壁の間に入り、霧のせいで上空にいた天使型が対応に遅れる。

そこに、初めて防衛側の乱れが見えた。
完全体が進路を押さえようとしているのに、マンティコアモンが勝手に獲物へ食らいつこうとして前へ出る。

後方でエンジェウーモンが何か指示を飛ばしたように見えたが、獣たちは聞いていない。
「深すぎる、引け!」

「いない!? あいつらは!」
霧で視界が狭いのもあり、岩壁の間で天使達が動きを止める。
目の前は、行き止まりになっており、ジャザリッヒモン達の影はない。
慌てる天使達は一瞬の遅れの後に、後方から劈くような音が鳴り響いていた。
それは、ジャザードモンと希理江であった。
天使達が岩壁の間に突っ込む刹那、ジャザリッヒモンを退化させ、その巨体を消し急激なGに耐えつつもブレーキをかけ後方を取った。



「しまっ!!」

「ジャザードモン!ワープ進化!!!!」

霧を晴らすかのようにジャザードモンを光球が包み込む。

身体に稲妻を纏わせ、エネルギー状の巨大な羽根を携えた銀色の飛龍が姿を現せた。

その尻尾の先端からは、身体に纏っている以上の稲妻が今にも破裂せんばかりと集約している。

「待っ!!???」

「レーザーカノン!!!!!!」

尻尾のレーザーガンに溜めた強力な光線が一気に解放され、天使達どころか岩壁含め山を抉り飛ばした。

「希理江、今更だけど何もあそこまで引き付けるのは危険すぎたんじゃ…。」

「はぁはぁ…いい、これでいいの。」

これで、少しは、叶くん達の負担を…生き残れる確率を上げる事ができるなら…。

行こう…今なら加勢に間に合うよ!」



ムゲンマウンテン山頂。
ゲートの前で独り言を呟いているシエルを前に、クラヴィスエンジェモンとエンジェウーモンがいた。
「本当にコレを連れて行くのですか？」
「報告によれば、確認されたのは、浮状 希理江とメタリックドラモンです。
小規模ですが、既に拠点を幾つか潰している相手…そして先程から先行したい隊との連絡が取れない。
援軍を向かわせたところで、二の舞が関の山…こいつをなんとか引っ張り出すしかありません。」
エンジェウーモンがシエルをチラリと見る。
そこにいるのは毫碌し、ブツブツと独り言を呟く様子を見る。
どう考えても噂になっている完全体、究極体天使型デジモンをひとりで50体以上斬れ伏し、三大天使が出張る事となったのは虚偽にしか思えなかった。
下手したら成長期にすら、手玉に取られそうな頼りなさに思える。
そう思い、不用意に手を伸ばす。
「!待ちな…」
次の言葉が紡がれる事はなかった。
本人達は気付かないうちに切り刻まれていた。
先程までの雰囲気と打って変わりその立ち姿の異様な静けさと異様さを漂わせていた。
近づかなくても首元に刃を掛けていると確信させる威圧感を放っている。



山頂の風は、下から吹き上げてくるというより、何かを拒むように上から叩きつけてきた。ゲート前の平地を見下ろせる岩壁の縁に、エアロブイドラモンと叶が、シエルを見下ろしていた。

下では、シスタモンシエルが微動だにせず立っていた。
「仲間相手に酷いじゃねえか、こういうのってアレだろ？確か…そうそう、人の心とかないんか？」

「…。」

シエルは叶の煽りにも何も反応しない。
あまりに静かで、むしろ山そのものがあの一体を中心に張りつめているように見える。ゲートの淡い光が背後から差し、その輪郭だけを白く縁取っていた。
守っているというより、門そのものになっている姿だった。

(…改めて前に立つとこいつのヤバさがよく分かる。)

叶は、唇の乾きを舌で湿らせ、隣を見る。
エアロブイドラモンは、もう迷っていなかった。

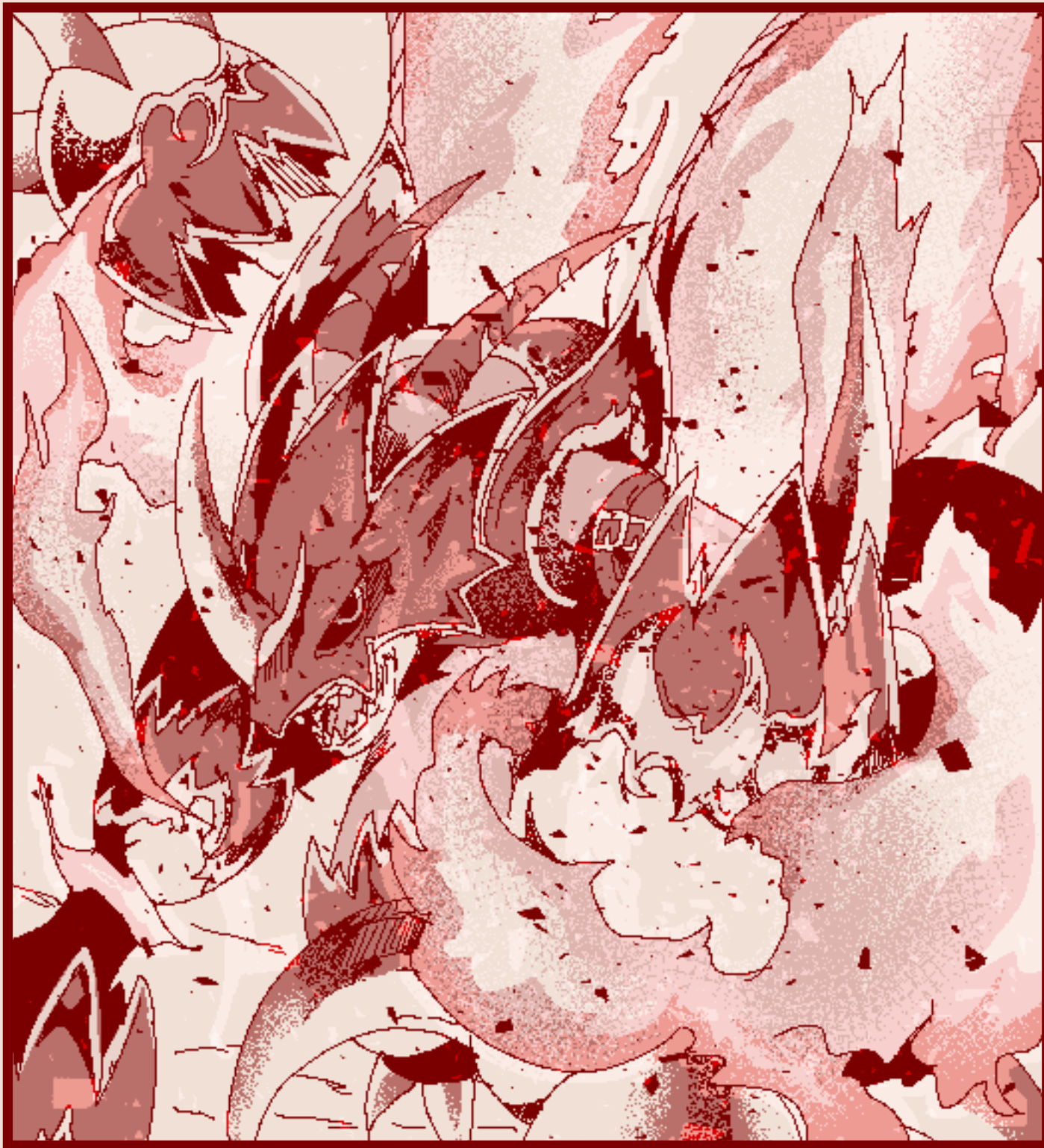
「にっ…叶ってば今更、ビビってる？」

「…まさか。」

叶は、震えている手を握りしめ、震えを止めた。
笑っているわけではないのに、声の端にだけいつもの調子が残っていた。
叶は、短く息を吐く。

「…行くぞ」

次の瞬間、二つの影が岩壁から、躍り出た。
シスタモンシエルの顔が初めて持ち上がる。
その目は閉じれていたが鋭くふたりに突き刺さる。
完全にこちらを捉えられたのだと、叶はその一瞬で理解した。



「行くぞ、エアロブイドラモン！デジメンタルアップ！」

叶のデジヴァイスから勇気のデジメンタルが燃えるように輝いた。

赤い光が全身を駆け抜け、装甲と角をまとめていく。熱が爆ぜ、岩壁の縁から炎が噴き上がる。

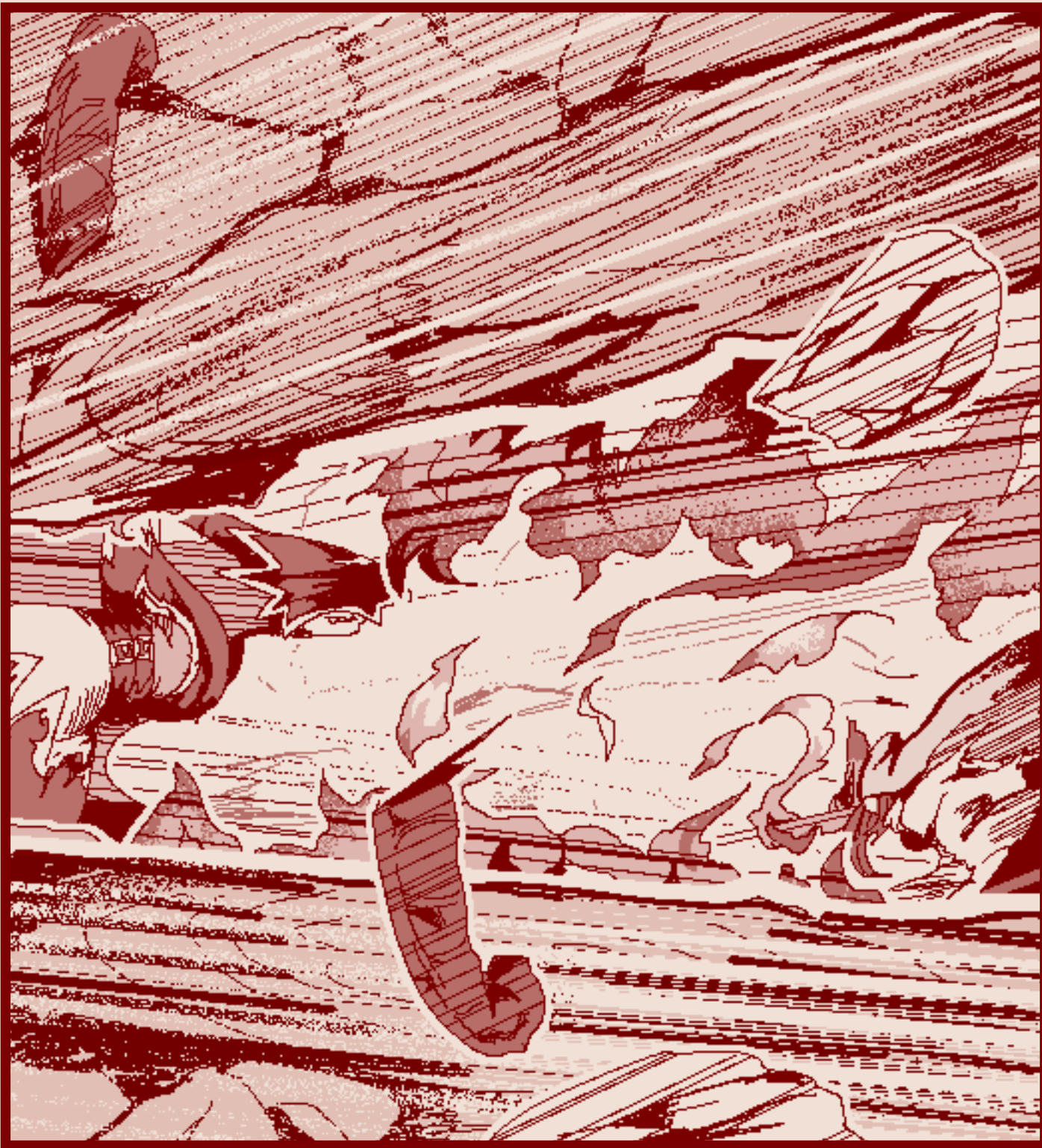
「ブレイズドラモン！」

地を踏み碎きながら飛び出したブレイズドラモンは、そのまま両腕を振り下ろした。螺旋を描いた炎が渦を巻き、空気ごと焼き尽くすようにシスタモンシエルへ落ちていく。

逃げ場を潰す、正面からの焼殺だった。

平場が火の海に沈む。

熱風が岩壁の上まで吹き上がり、叶は、思わず腕で顔を庇う。



(いける!)

と思ったのは、一瞬だけだった。
炎の中心で、白い閃きが走った。

「炎を斬った!?!」

ただ火を裂いたのではない。渦の芯を見抜いたように、螺旋の流れそのものを断ち切った。巨大な火炎は真ん中から割れ、左右へ弾けて岩場を舐めたかと思えば今度は左右の岩壁が切断され、崩れ落ちる。

炎の向こうから、シスタモンシエルが一步、前へ出る。

「=====」

ブツブツと何か呟いているが、焼けてもいない、止まってもいない。
ただ、侵入者の位置を定めただけのような歩みだった。



「化物が!!!」

ブレイズドラモンの装甲が砕けるように光へほどける。今度は純真のデジメンタルが青白く輝き、異なる紋様が全身を包み込んだ。尾を引く光が風に流れ、姿が一変する。

「バンチョウヤシャモン！」

妖さを帯びた影が木刀を地に突き刺す。

次の瞬間、シスタモンシエルの足元から岩が唸った。

巨大な茨が、地面を破って何本も噴き上がる。平場の石畳めいた地面を下から押し割り、足場ごと持ち上げ、ねじ曲げ、崩しながら伸びていく。単なる拘束ではない。

足元を殺し、立つ場所そのものを奪う攻撃だった。

岩盤が割れ、ゲート前の床が斜めに沈む。シスタモンシエルの立っていた位置が傾き、その白い体がわずかに浮く。

「取った…！」

バンチョウヤシャモンが二刀の木刀を掲げ、飛びかかる。

だが、その“わずか”の間に、また白い線が閃いた。

巨大な茨が、次々と断ち切られていく。

太さなど関係なくしなる棘の束が、まるで紙細工のように切り払われ、切断面を晒したまま崩れ落ちる。

「っ!!!」

その中の一閃がバンチョウヤシャモンの片足を切り裂く。

足場を崩されたはずのシスタモンシエルは、その砕けた岩片を踏み石にするように軽く跳び、沈みゆく平場から別の足場へ移っていた。

崩れているのは地面の方なのに、体勢を崩しているようには見えない。

むしろ、狭まり、壊れ、定まらなくなった足場の方が、彼女には都合がいいのではないかとすら思えた。



「っ!!!…まだ…だ!まだだだ!!!!!!」

ヤシャモンの姿が再び解け、今度は知識のデジメンタルが鋭い金色を放つ。機動力へと姿を縮めながら、翅と装甲が形を成す。

「マードー・ビーモン!!!」

細く鋭い羽音が山頂の空気を震わせた。

崩れた足場を次々と飛び移るシスタモンシエルへ向けて、マードー・ビーモンは両腕を広げる。そこから溢れたのは無数の蜂の軍団だった。

単体では小さいが、群れになれば、視界を奪い、刃の届く範囲を埋め、逃げ場を塞げる。黒と金の雲が一気に包み込む。

崩れた岩の間を縫い、上から、横から、背後から、蜂の群れがシエルへ殺到した。

羽音が轟音じみた一塊となり、白い姿を見えなくする。

そして次の瞬間、群れの中で幾百もの火花が散った。

…斬られていた。

一匹ずつではない。包囲そのものが、刻まれている。

蜂の雲が、見えない刃に触れたようにいくつもの断片へ裂け、勢いを失ったまま空中で霧散していく。飛び交う羽音は悲鳴のように途切れ、残った個体も2、3の閃きで沈黙した。(全部…全部、斬ったのか…?)

マードー・ビーモンの喉の奥が冷える。

(分かっていた…分かっていたが…どこまでも化物!!!)

シスタモンシエルは、群れを抜けていた。

いや、最初からそこに包まれていなかったようにすら見えた。

崩れた岩の一点を踏み、真っ直ぐこちらを見ている。

次の瞬間、その姿が消えた。

「上だ!」

葉が叫んだのは、ほとんど反射だった。

マードー・ビーモンが翅を打ち、横へ飛ぶが遅かった。

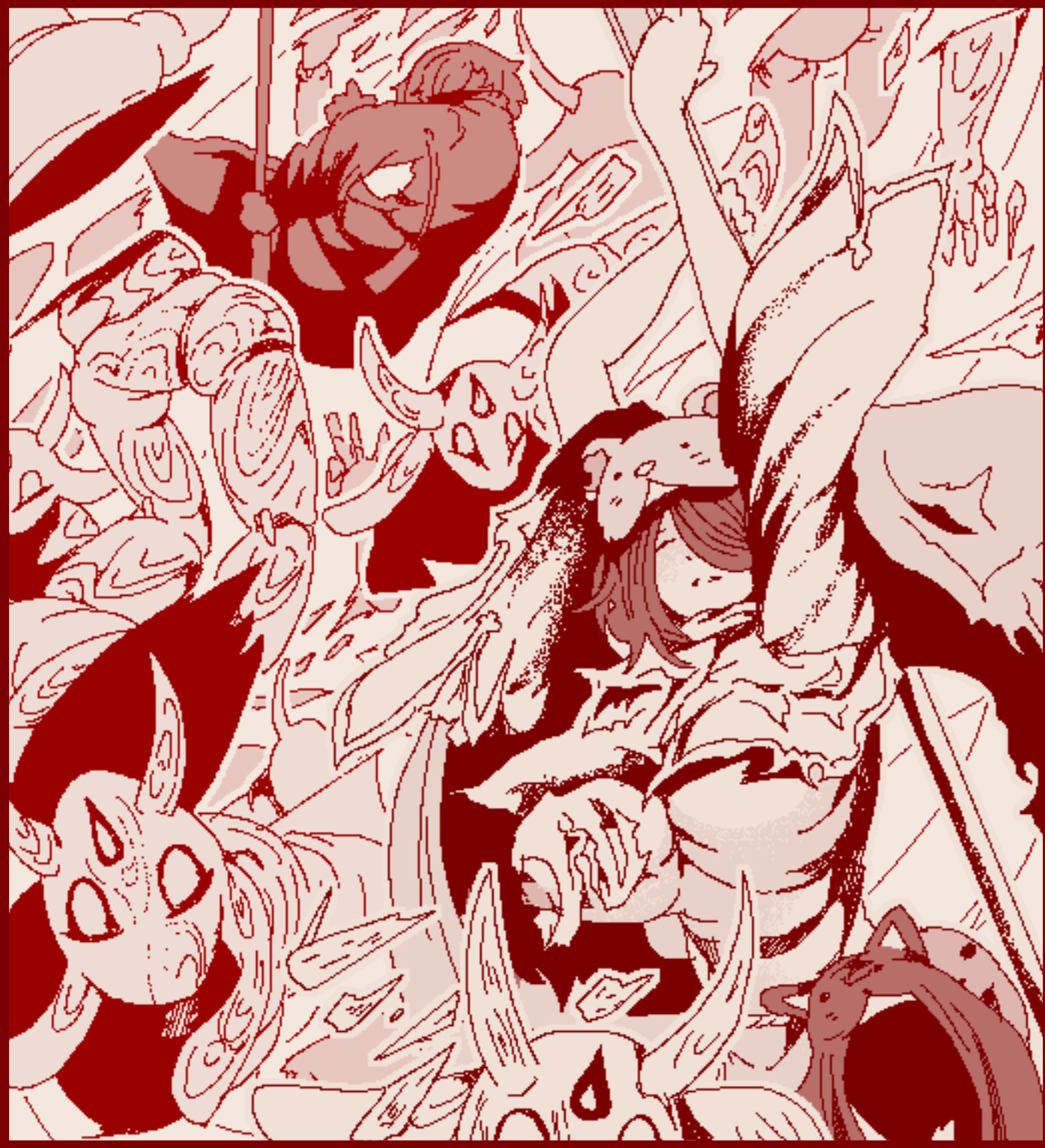


白い刃が走る。

空中で火花が弾け、マードラー・ビーモンの装甲が裂け、進化が維持できず、光がほどけてブイモンの姿が露わになる。

鮮血が吹き出し、ブイモンの身体が宙を舞う。

しかし、ブイモンの視線は、まだシエルに向けられていた。



崩れた岩場のあちこちからバンチョウヤシャモンのに作られた傀儡が湧いた。粗雑ではあるが、一面を覆い付く程の傀儡が斬られることを前提にした囷としてシエルの間合いに雪崩れ込む。

叶は自身を、それに紛れて飛び出した。

手には事前に拾っていた鉄パイプ。

デジモン相手にまともな武器ではない…分かっている。

だが、人間が人間のまま差し込める一撃があるとすれば、この混乱の中しかない。

傀儡が次々と斬られる。

数が意味を失う速度だった。白い刃が振るわれるたびに、傀儡は胴を断たれ、首を飛ばされ、形を保てず崩れていく。

それでも数だけは押し寄せ、視界の端を埋めた。

そのわずかな死角…そこへ、叶は全身を投げ込む。

「——ッ！」

鉄パイプを振り下ろす。

狙いは頭ではない。

腕でもない。

踏み込みの軸足。

ほんの一瞬、動きが止まればそれでいい。

だが、振り抜くより早く、金属が乾いた音を立てた。

鉄パイプは中ほどからあっさり断たれ、半分が宙を舞う。

しまった。と思うより先に、白い刃がこちらへ向く。

距離が、消える。



叶の胸の奥に、冷たいものが入った。
衝撃よりも、呼吸が途切れた違和感の方が先に来た。視線を落とすと、シエルの刃が自分の胸を貫いている。
そう理解した瞬間、世界から音が遠のいた。
ただ、その瞬間叶が見たのは隠れているヴォーボモンであった。
声は出ないが確かに口でヴォーボモンに言った。

「今だ。」

その一瞬のために、全部を差し出したのだと分かる状況。
シエルの腕が、ほんのわずかに止まっている。傀儡を斬り、物量と乱れた足場、不意の一撃を刺してきた人間を刺し、その動作の連なりの中で生まれた、本当に針の先ほどの空白。
そこを、影が走った。
ヴォーボモン。
ずっと潜んでいた本命が、崩れた足場の縁から飛び出してくる。
まっすぐではなく叶達がか最初に作り、バンチョウヤシャモンが壊し、マードラー・ビーモンが空に散らし、傀儡と人間の命でこじ開けた、その細い軸を正確になぞるように。
(ブイモン…叶…！)

ヴォーボモンの目元には涙が零れたが、足は止まらなかった、止める訳にはいかなかった。
ゲートの光が、ヴォーボモンの輪郭を白く染める。
シエルの視線がヴォーボモンへ動こうとした瞬間。
「叶くん!!!!」

上空からメタリックドラモンと希理江が現れた。
その部外者の乱入がシエルの反応をもう半瞬遅くした。



叶が血を吐きながらも腕を伸ばした。
立ててもいなくせに、その腕はシエルの足を掴み食らいつこうとする。
メタリックドラモンの尻尾が刃のようにシエルに向かう。
シエルの意識が、ヴォーボモンから再びそちらへ引かれる。
その際に、ヴォーボモンがゲートへ飛び込んだ。
光が裂け、風が爆ぜ、山頂の空気がひっくり返る。
ゲートが現実世界への道として開き、白い奔流がすべての輪郭を呑み込んでいく。
叶は薄れゆく意識の中で、その光景だけを見届けた。
(本当に…勇太にそっくりだ…ふっ世話が…や…。)
胸の奥から熱が失われていく冷たさの中で、これまでの誰かにビクついていた時と違う、
妙な温かさが残った。



「う…ん。」

光の中でなくなっていたヴォーボモンの意識が戻る。
周囲は岩場ではなく、コンクリートであった。
来たのだついに、勇太がいる筈の人間の世界に。
そう思い、顔を上げたヴォーボモンが見たものは。

「なに…これ？」

意識が戻ると一気に濁流の様に五感全てに不快感が伝わった。
何かを焼く炎の…死の臭い。
爆音と共にビルから爆発と黒い煙が立ち上る。
爆音の中には、人間と思われる叫び声もあった。
その様相は正しく地獄絵図であった。
ヴォーボモンは自身を疑ったが、ヴォーボモンがいたそこは正しく MW の東京、
新宿の都庁であった。
なにより、異様であったのは遥か彼方を包む結晶の壁。
それは天使の街で見たものと同じように思えた。

「勇太…。」

ヴォーボモンの胸に大きな…目の前に広がり黒煙のようなすす黒い不安が込み上げてきた。